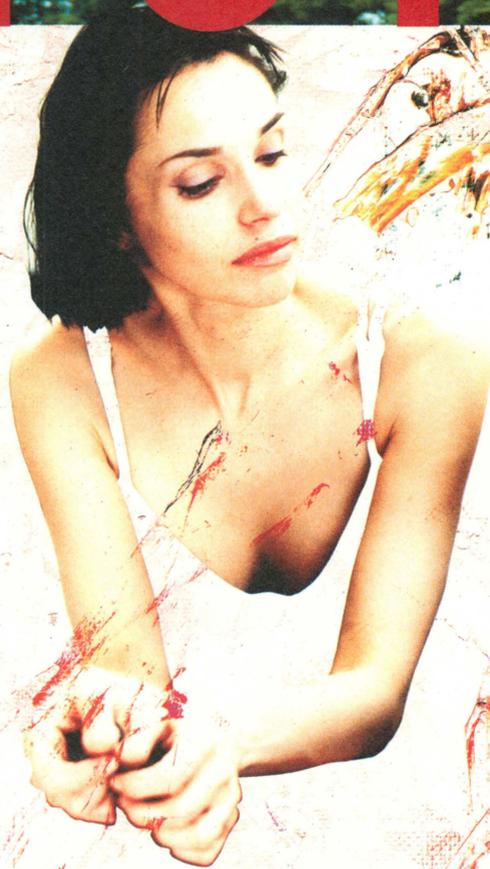


History



第54回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門公式出品作品

諏訪敦彦監督作品

History

ベアトリス・ダル

町田康

馬野裕朗

撮影監督
キム・ロリーヌ・シャンツァエ

プロデューサー
仙頭武則

監修
和田雄

音楽
菊池信之

衣裳
林千奈

編集
鈴木治行

脚本
諏訪敦彦

制作
大重裕一

制作
サンエントマーズ・ワークス

電話
T-MAGLIA

WOWOW+東京マテル

配給
東京マテル

監修
フランス大使館文化部

2001年

日本映画

35mm

カラー

三分

WORKS

そこはいつしか

新たな愛のうまれた場所になった。

誰も気づかないうちに…。

ベアトリス、彼女さえ…。

History



諏訪敦彦監督作品

撮影監督—キャロリーヌ・シャンブチエ

ベアトリス・ダル

町田康

馬野裕朗

プロデューサー—仙頭武則

照明—和田雄二

録音—菊池信之

美術—林千奈

音楽—鈴木治行

編集—諏訪敦彦 大重裕二

制作—サンセントシネマワークス

製作—エレクトロニクス

WOWOW+東京テアトル

配給—東京テアトル

2001年/日本映画/35mm/カラー/111分

WORKS

もう消せないのだ。出会ってしまったから。できるのはただ見つめること。

1959年、本国フランスで、そして日本で話題を呼んだ『二十四時間の情事』。名のないフランスの女と日本の男。彼らは広島で出会った。

「私はヒロシマですべてを見たわ」「いや、君は見えていないよ」
被爆地であるヒロシマへ、そして出会いの地(広島)で2人は愛しあった。
そして男はただ、女を見つめた。40年後のあの時とおなじその場所、またそのような男女がうまれる。

ひとりの監督が自身の故郷広島で、『二十四時間の情事』のリメイクを撮影している。その横には台本を手にした女優、ベアトリス・ダルがいた。
撮影は順調にスタートしたかのように見えた。40年前にマルグリット・デュラスが書いた「ヒロシマモナムール」。しかし、この台本通り演技しなければならぬことに、ベアトリスは次第に違和感を覚えはじめる。超えることのできない「時間」という大きな壁に、苦しみ苛立つベアトリス。そして彼女はついに演じることができなくなる。

相手役の男は何も言わず、ただ女を見つめた。そして迎える撮影の中断。不穏な空気が流れる撮影現場にあるひとりの真白なキャンバスに5つの筆で絵を描いていくような「ベアトリス」(町田)「馬野」(シャンブチエ)「諏訪」のコラボレーション。「これほどまでに真実の私を撮った映画があったらどうか」。ベアトリスは呟き、ただ泣いた。

女優としてひとりの女として、悩み、微笑む彼女は美しかった。ふれられるほどに近くにいながらも、遠くから、ただ見つめられる彼女はいつでも美しくかった。これはフィクションなのか、ドキュメンタリーなのか。それはすべてを掬い取るその視線の中に取められていく…。

影と光に包まれた女を美しくもはかなく見つめつづける監督に、『2/DUO』と前作『M/OTHER』で脚本なしの即興演技での創作という、新しい形としての映画を浸透させ話題を呼んだ諏訪敦彦、名画のような美しい映像の中に女を焼きつける撮影には「ゴダールの決別」のキャロリーヌ・シャンブチエ、『二十四時間の情事』でエマニュエル・リヴァ演じたヒロイン「女」に「ベティ・ブルー 愛と激情の日々」

訪問者が現れた。フランスの女と日本の男。何もいわず、何も言えない。言葉の通じない二人。だから男はただ、女を見つめた。瞬きをする間にきつと彼女は消えてしまおう。しかし、彼女を見つめつづけるもうひとつの視線が、いつでもそこにはあった。まるで遠くから愛撫でもするかのように。そう出会ったその瞬間からずっと。
HIROSHIMA——そこはいつしか新たな愛の生まれた場所になった。
誰も気付かないうちに…。ベアトリス、彼女さえ。



11月レイトショー! すべては HIROSHIMA から始まった…。

特別前売ご鑑賞券¥1500 絶賛発売中!!

テアトル梅田のサービスデー

火曜日: 男性の方 ¥1000 / 水曜日: 女性の方 ¥1000 / 12月を除く第1水曜日 ¥1000均一 (12月は1日)

梅田ロフトB1 06(6359)1080

テアトル梅田

http://www.cinemabox.com/